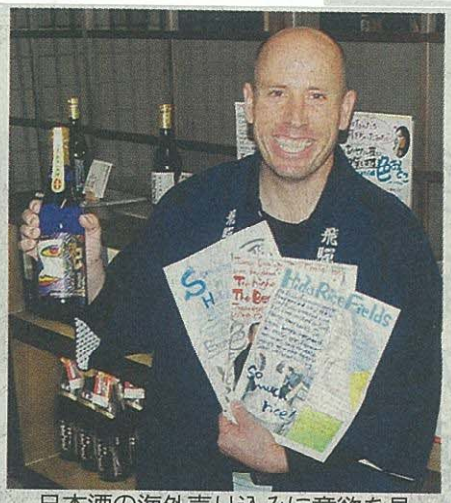
2012年（平成24年）11月13日（火曜日）
中日新聞

世界に届け 日本酒の味

日本酒を海外に広めようと、米国人の蔵人が岐阜県で酒造りに励んでいる。飛騨市古川町の老舗、渡辺酒造店のダリル・コディ・ブレイルズフォードさん㈣。日本酒を「国酒」として海外に売り出す動きが活発化する中、酒造店も「酒造りの思いを世界に伝えてほしい」と、窓口役として期待を寄せている。（飛騨通信部・島将之）

英語で売り込む窓口役

飛騨の米国人蔵人



日本酒の海外売り込みに意欲を見せる米国人の蔵人ブレイルズフォードさん＝岐阜県飛騨市古川町で

米ユタ州出身のブレイルズフォードさんが酒造店で働き始めたのは六年前。日本人の妻との結婚後、あいさつのために両親が住む同県高山市を訪れ、父親から勧められた日本酒を初めて口にしたことがきっかけだった。「香りが洋酒と違ってフルーティーで、うまみもある。みずみずしくて飲みやすい」。日本酒の魅力を知り、求人広告にあった渡辺酒造店の門をたたいた。清掃に始まる下積み暮らしを経て、今はコメを蒸したり、こうじ米の仕込みを手伝ったりする。

「夢は日本酒を海外に広めること」。ブレイルズフォードさんは十月、米サンフランシスコで開かれた展示即売会「SAKE・DAY」に参加。渡辺酒造店など全国二十七の蔵元が出展し、英語で日本酒を売り込んだ。

「どう作るの」「水以外に大切なものは」。現地での高い関心に手応えを感じ、ステーキハウス店にも飛び込みでPRした。

日本酒の海外消費が進み、活躍の場は広がっている。地元の高山市では十三、十四の両日、県内初の「ジェトロ日本酒輸出商談会」があり、渡辺酒造店も参加する。米国、フランスなど五カ国のバイヤーと直接交渉し、酒造店も「取引の全てを任せたい」と、ブレイルズフォードさんに一任の考えだ。

自身が翻訳した英語版のチラシも準備して臨む。「自分のプライドを込めた酒。一緒に飲んで、日本のことを好きになってほしい」。米国人の蔵人が、売り込みの先頭に立つ。

※国内消費量は国税庁調べ、輸出量は財務省・貿易統計による数量

国内消費低迷 国外に販路求める動き

日本酒の国内消費が低迷する一方で、国外に販路を求める動きが広がっている。

国税庁などによると、日本酒の国内消費量は、ピークだった一九七五年の百六十七万キロリットルから、二〇一〇年は五十九万キロリットルにまで減少。同じ時期の岐阜県の清酒の国内出荷量も、二万一千キロリットルから五千八百キロリットルまで落ち込んだ。

一方、海外では健康志向による日本食ブームの影響などで、輸出量は〇一年の七千キロリットルから、一一年には一万四千キロリットルに倍増した。

内閣官房国家戦略室は今年、日本酒と焼酎を「国酒」と銘打ち、海外に積極的に売り込む方針を示した。ジェトロ岐阜と高山市が主催する商談会は、岐阜県内の中小蔵元が海外販路の拡大を図る目的で、三十の蔵元が参加を予定している。